

令和元年6月21日現在

機関番号：31604

研究種目：基盤研究(A) (海外学術調査)

研究期間：2014～2018

課題番号：26257010

研究課題名(和文) 葬制から見た古代エジプト文明の変化とその社会的背景に関する学際的研究

研究課題名(英文) Interdisciplinary research on the transition of funerary customs of the Ancient Egyptian Civilization and its social background

研究代表者

吉村 作治 (Yoshimura, Sakuji)

東日本国際大学・経済経営学部・学長

研究者番号：80201052

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 32,900,000円

研究成果の概要(和文)：古代エジプトの中王国時代と新王国時代は文化、社会の多くの面で変化が見られる。本研究はその変化について、墓から発見された資料の学際的な分析によってその特質を評価し、変化の背景を探った。その結果、王を介さず直接個人が神と交流できる信仰の形態がこれまで考えられていた以上に浸透しており、人々の宗教観の変化が原因となって古代エジプト社会に大きな変革をもたらした可能性が提示された。個人の信仰に関する議論は古くから行われてきたが、埋葬に関する資料から具体的に検討することができた意義は大きいと考えられる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、紀元前2千年紀のエジプトに起こった変化について、画像・文字資料だけでなく墓から出土した物的証拠から検討を行い、人々の宗教観の変化が大きな役割を果たしていた可能性を示すことができた点である。ここで焦点が当てられたのは個人と神との直接的な結びつきであり、過去の研究ではこの延長線上に西欧の福音主義を見出していた。西欧の宗教革命が示すように宗教は社会変化の大きな原動力となるものであり、現代的な信仰形態の萌芽の様相を、考古学的資料から描き出した本研究の社会的意義は大きいと言える。

研究成果の概要(英文)：Various aspects of the Ancient Egyptian society had changed during the Middle and New Kingdoms. The present research was aimed at understanding characteristics of this change through interdisciplinary analyses of objects mainly from cemeteries and searching for a catalyst for the change. The result shows the possibility that the emergence of the 'personal piety', an individual's personal relationship with a deity, where the king as the intermediary between the human and divine realms was no longer necessary, had played an important role. The 'personal piety' has long been argued, and traditional models of personal piety are based on texts and images. Our result is noteworthy because the material evidence of the cemetery also demonstrated that the idea of the 'personal piety' was quite pervasive throughout various social classes more than previously expected.

研究分野：エジプト考古学

キーワード：古代エジプト文明 葬制 宗教考古学 中王国時代 新王国時代 メンフィス・ネクロポリス 個人的信仰 変化

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

古代エジプト史にはいくつかの転換期があるが、中でも特に重要なのが中王国時代(前21~17世紀)と新王国時代(前16~11世紀)である。この間は第2中間期(前17~16世紀頃)と呼ばれ、西アジアからの移住者によって所謂「ヒクソス」王朝が樹立された。中王国時代と新王国時代は多くの面で異なることが知られている。例えば、王による伝統的なピラミッド建設は中王国時代に途絶えてしまうことに代表されるように、両時代の期間に重要な変化があったと考えられる。その原因を明らかにすることは、エジプト文明の特質を理解する上での鍵となるはずだが、具体的な資料を用いてこの変化を評価している研究例は驚くほど少ない。

研究代表者は、アブ・シール南丘陵遺跡とダハシュール北遺跡という2つのメンフィス・ネクロポリスに位置する遺跡で長年調査を行っている。ここから発見された中・新王国時代の墓には両時代の葬制の違いが顕著に認められ、葬制に関連する遺構・遺物群の分析から当時の変化の要因にアプローチできると考え、本研究課題を進めた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、古代エジプト文明のターニング・ポイントであった中王国時代から新王国時代にかけての葬制の変化を、考古学的資料を軸に分析・整理し、変化の背景について考察することである。考古学だけでなく、文献史学、建築史学、形質人類学、X線分析を含めた学際的アプローチから分析を実施し、変化の背景を実証的に検討する。

3. 研究の方法

アブ・シール南丘陵遺跡、ダハシュール北遺跡の中・新王国時代の資料を主な対象として、大きく分けて2つのプロセスで研究を実施した。

- (1) 葬制の変遷過程の詳細を明らかにするために、墓の編年構築を実施し、一方で建築史学、形質人類学、X線分析のそれぞれの視点から、葬制の変化の特質解明に繋がるような資料の取得・分析を目指した。
- (2) (1)の結果を受けて当時の変化の特質を明らかにし、壁画・文字資料や当時の社会に関する既往の研究と対応させながら、変化の背景についての考察を実施した。

4. 研究成果

(1) 考古学的分析

ダハシュール北遺跡では、過去の資料と研究期間内に行われた発掘の成果を統合し、墓の編年構築が進められた。中王国時代においては、土器の編年を軸に副葬品の組成の変遷を提示した。同時に、墓の規模や出土遺物から被葬者の階層差についても分析を実施した。この遺跡はピラミッド周辺墓地に埋葬された王族・高官よりも低い階層に位置付けられるが、遺跡内でも明確な差異が認められ、墓の規模や副葬品に基づき3つのグループに分類された。これらの分析から、本遺跡が使用された期間(中王国時代後半)では副葬品組成は大きく変わらないが、中王国時代の前半とは顕著な差が見られた。死者をオシリス神の似姿として表す埋葬様式が後半の特徴であり、その変化には当時隆盛したオシリス神信仰が大きく影響していることが指摘されている。死者をオシリス神の似姿として表す埋葬様式はしばしば宮廷タイプ(Court type)と呼ばれ、王族・高官に特徴的とされていたが、本遺跡ではどのグループにおいてもオシリス神信仰の影響が認められ、こうした概念が従来考えられていたよりも幅広い階層に通底していたことが分かってきた。

新王国時代においては、ダハシュール北遺跡で最古の段階に当たる第18王朝中期の墓が発見され、副葬品には南のテーベ地域との顕著な類似が認められた。この後に続くラムセス王朝期の墓は過去の調査で数多く発見されたが、特に棺など埋葬に関連する物質文化においてはテーベ地域と異なる様相が認められていた。従って、新王国時代のメンフィス地域とテーベ地域の埋葬習慣は、ある段階から分岐して変遷していく様子が明らかになってきた。

アブ・シール南丘陵遺跡では、これまでに調査を実施したラムセス2世の王子カエムワセトの石造建造物と彼の娘とみられるイシスネフェルトの墓の未発掘部の調査と全体的な精査と保護、そしてイシスネフェルトの石棺の保存修復作業を中心に実施した。これらの遺構、遺物の分析を通して、ラムセス王朝期における王族の埋葬習慣の一端が明らかにされた。

(2) 建築史的な分析

ダハシュール北遺跡の中王国および新王国時代の地下式横穴墓(シャフト墓)は、被葬者が亡くなってから墓の造営作業が開始されたのではなく、被葬者未決定の段階で掘削は進められていた可能性を提示した。具体的にいうと、中王国時代には竪坑が先行して掘削され、新王国時代では竪坑と一辺4mほどの矩形の地下室が西側に用意された。そして埋葬される人物が決まると、棺を納める小部屋や副室などその人物にとって必要な空間が急いで作り出された可能性が高い。本研究期間で進められた調査研究においても、この仮説に大きく矛盾する遺構は検出されず、「セミアオーダー」ともいふべき2段階の造営手順が踏まれたと推察される。この他、中王国時代の大型岩窟墓(No.S158)では、埋葬室へ石棺を搬入し、その後再利用を目的として外部に取り出された形跡が観察された。重量物を設置、搬出する手順を示す遺構として興味深い。周辺には同規模の岩窟墓が作られており、これらの調査を進めることで一連の工程を描

くことが期待される。

アブ・シール南丘陵遺跡で発見されたイシスネフェルト墓の石棺は高位の人物にふさわしい壮麗な装飾で彩られていたが、地下埋葬室の南東隅に接するように置かれていたため、壁に面した石棺側面を詳しく調査することが叶わなかった。そこで2014年度から石棺を地下室の中央へ移動する準備を開始し、2017年度に移動を完了することができた。石棺側面の状態は良く、青と黒の顔料を用いたレリーフ装飾の記録作業を実施した。また石棺の表面を詳しく観察したところ、表面に船の図像が粗い刻線で表現され、その上からイシスネフェルトの図像が刻まれていることが判明した。刻まれた船の向きや表面の研磨などから判断し、石棺に用いられた石材は、近傍のマスタバ墓の角柱を転用した可能性が挙げられた。

(3) 形質人類学的分析

アブ・シール南丘陵遺跡で発見された第2中間期末/新王国時代初期の集団で埋葬された人骨を精査した結果、ミイラ処置が行われておらず、脛骨あるいは腓骨に死の直前あるいは直後に極めて暴力的な扱いを受けた可能性が高いことが分かった。総合的に見て、この集団の埋葬人骨は、何らかの緊急避難による埋葬をせざるを得なかった可能性がある。ダハシュール北遺跡の中・新王国時代の埋葬の人骨は数が多いため分析は全体の半数程度に留まったが、被葬者の数、性別、死亡時の年齢など、墓の考古学的分析に必要な基本的な情報を提供することができた。また、全ての個体が基本的にコーカソイド的な特徴を示すこと、数の面で性別に偏りがなく、鼻腔天井が観察可能な20個体全てで破壊されておらず、脳を出す処理が行われていないことが明らかになった。顔に関して華奢な個体と頑丈な個体があり、華奢な個体ほど墓の規模が大きいという傾向が認められ、被葬者の社会階層と形質との関係が注目される結果となった。

なお、ダハシュール北遺跡で発見された遺体には、埋葬後に人為的な損傷を受けた痕跡が多数見られ、特に大腿骨に鋭利な刃物で斬撃を受けた痕跡が集中していた。このような痕跡を生んだ活動の目的は不明だが、例えば墓の再利用の際に前の利用者の遺体に施していた処置の可能性も考えられる。このような再利用時の痕跡が確認されることは極めて稀であり、想定外の重要な成果であった。

(4) X線分析

現地調査では可搬型の蛍光X線分析装置および顕微ラマン分光分析装置をアブ・シール南丘陵遺跡へと持ち込み、同遺跡で出土したガラス製品、ファイアンス製品、金属製品について、非破壊的分析を実施した。第2中間期末/新王国時代初期の集団埋葬からの出土遺物に焦点を当て、化学組成による生産地の推定を試みた。ガラス製ビーズについては、原料由来で混入する微量元素に着目し、新王国時代のエジプト製ガラスではなく、前2千年紀のメソポタミア製ガラスに類似していることを明らかにした。金属製品はヒ素銅、鉛、青銅の3種類を同定し、こちらもメソポタミア製の可能性が高いと結論付けられた。これまでの成果から、時代によってガラス、ファイアンス、金属製品の化学組成が変化していたことが明らかになり、化学組成から遺物の製作年代を推定する手掛かりを得ることができた。

(5) 総括：変化の特質と背景

考古学、建築史学、形質人類学、X線分析の成果は、通時的な変化と社会階層差という2つの軸によって整理された。その結果を総合して、葬制の変化には次の2つの傾向が見られた。

中王国時代後半に、死者を冥界の王オシリスの姿として表す埋葬様式が幅広い階層に浸透していたこと、新王国時代後半に、エジプト北部と南部の埋葬の物質文化が分化し、異なる発展過程を経ていたという事実である。

の成果は、死後に冥界の王となるのは現世の王だけでなく、多くの人々が同じ来世を望み、それを埋葬で積極的に表現することが許容されていたことを意味する。当時冥界の王オシリスの信仰が盛んであり、王以外の人々も祭礼に参加し、この神の聖地に石碑を建てることができた。古代エジプトでは神に対して直接交流できるのは本来王だけだったが、死者をオシリス神の似姿として表す埋葬様式の浸透は、王を介さず直接神との交流を図る「個人的信仰(Personal Piety)」の萌芽と見ることができる。

新王国時代の最末期には王を中心とする北部エジプトと、アメン神官団を中心とする南部エジプトに国土が分断され、第3中間期と呼ばれる時代に移っていく。の成果は、こうした分断が物質文化の面ではより早い段階から進んでいた可能性を示唆している。王と神官団の対立の背景には王の権威失墜があり、その原因には「個人的信仰」の拡大が影響していたことは十分考えられる。ただし、当時の状況については異なる解釈も提出されており、今後検討を要する課題である。

「個人的信仰」の概念や諸相についてはエジプト学で100年以上に渡って議論されてきた。本研究によって明らかになった事実は、古くから議論されてきた「個人的信仰」の進展が埋葬の物質文化からも裏付けられる可能性を示唆している。こうした当時の宗教観の変化が、紀元前2千年紀のエジプト文明の変化に影響していた可能性を、本研究の成果から指摘することができた。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計 15 件)

- 吉村 作治、矢澤 健、近藤 二郎 (他 4 名、1 番目)、2019、エジプト ダハシュール北遺跡調査報告 第 25 次調査、エジプト学研究、25 号、pp.3-24、査読無し、
http://www.egyptpro.sci.waseda.ac.jp/pdf%20files/JES25/1_dahshur25.pdf
- Sakuji Yoshimura, Ken Yazawa, Jiro Kondo (他 4 名、1 番目)、2019, Brief Report of the Excavations at Dahshur North: Twenty-Fifth Season, The Journal of SHOUHEI Egyptian Archaeological Association, Vol.7, pp.35-75, 査読無し、
<https://egypt-archaeology.jp/pdf/JSEAA7.pdf>
- Sakuji Yoshimura (他 4 名、1 番目)、2018, Intact Middle Kingdom Anthropoid Coffin of Sobekhat from Dahshur North: Discovery, Conservation and X-Ray Analysis, The Journal of Egyptian Studies, Vol. 24, pp.158-177, 査読無し、
http://www.egyptpro.sci.waseda.ac.jp/pdf%20files/JES24/7_sobekhat.pdf
- Sakuji Yoshimura, Ken Yazawa, Jiro Kondo (他 4 名、1 番目)、Brief Report of the Excavations at Dahshur North: Twenty-fourth Season, 2017, The Journal of SHOUHEI Egyptian Archaeological Association, Vol. 5, 2018, pp.3-37, 査読無し、
http://www.shk-ac.jp/img/lab/regional_egyptian/outcome/pdf/JSEAA5.pdf
- 吉村 作治、河合 望、近藤 二郎 (他 5 名、1 番目)、2018、第 26 次アブ・シール南丘陵遺跡調査概報、エジプト学研究、第 24 号、pp.13-24、査読無し、
http://www.egyptpro.sci.waseda.ac.jp/pdf%20files/JES24/3_abusir26.pdf
- 吉村 作治、河合 望、近藤 二郎 (他 5 名、1 番目)、2017、第 25 次アブ・シール南丘陵遺跡調査概報、エジプト学研究、第 23 号、pp.114-126、査読無し、
http://www.egyptpro.sci.waseda.ac.jp/pdf%20files/JES23/8_abusir25.pdf
- 吉村 作治、河合 望、近藤 二郎 (他 6 名、1 番目)、2016、第 24 次アブ・シール南丘陵遺跡調査概報、エジプト学研究、第 22 号、pp.27-39、査読無し、
http://www.egyptpro.sci.waseda.ac.jp/pdf%20files/JES22/5_Abusir24.pdf
- 吉村 作治、河合 望、近藤 二郎 (他 5 名、1 番目)、2016、第 23 次アブ・シール南丘陵遺跡調査概報、エジプト学研究、第 22 号、pp.15-25、査読無し、
http://www.egyptpro.sci.waseda.ac.jp/pdf%20files/JES22/4_Abusir23.pdf
- 坂上 和弘、馬場 悠男、平田 和明、2016、第 12 次アブ・シール南丘陵遺跡調査において出土した集団埋葬墓人骨の人類学的分析 (予報)、エジプト学研究、第 22 号、pp.51-68、査読無し、
http://www.egyptpro.sci.waseda.ac.jp/pdf%20files/JES22/7_AbusirSkeletalRemain.pdf
- 阿部 善也、大越 あや、内沼 美弥、扇谷 依季、2016、非破壊オンサイト蛍光 X 線分析によるアブ・シール南丘陵遺跡集団埋葬墓出土遺物の化学的特性化、エジプト学研究、第 22 号、pp.69-89、査読無し、
http://www.egyptpro.sci.waseda.ac.jp/pdf%20files/JES22/8_AbusirX-ray.pdf
- Sakuji Yoshimura, Ken Yazawa, Jiro Kondo (他 4 名、1 番目)、2016, Brief Report of the Excavations at Dahshur North: Twenty-third Season, 2015, The Journal of SHOUHEI Egyptian Archaeological Association, Vol. 3, pp.3-22, 査読無し、
http://www.shk-ac.jp/img/lab/regional_egyptian/outcome/pdf/JSEAA3.pdf
- Sakuji Yoshimura, Ken Yazawa, Jiro Kondo (他 3 名、1 番目)、2016, Brief Report of the Excavations at Dahshur North: Twenty-second Season, 2015, The Journal of SHOUHEI Egyptian Archaeological Association, Vol. 1, pp.3-19, 査読無し、
http://www.shk-ac.jp/img/lab/regional_egyptian/outcome/pdf/JSEAA1.pdf
- 矢澤 健、吉村 作治、2016、エジプト・ダハシュール北遺跡の中王国時代のシャフト墓について：遺構の形状・規模・分布の分析、オリエント、第 58 巻第 2 号、pp.196-210、査読有り
- Sakuji Yoshimura and Masahiro Baba, 2015, Recent Discoveries of intact tombs at Dahshur North: Burial customs of the Middle and New Kingdoms, Proceedings of the Tenth International Congress of Egyptologists, University of the Aegean, Rhodes, 22-29 May 2008, Orientalia Lovaniensia Analecta, Vol.241, pp.545-556, 査読有り
- Masahiro Baba and Ken Yazawa, 2015, Burial Assemblage of the Late Middle Kingdom shaft-tombs in Dahshur North, The World of Middle Kingdom Egypt (2000-1550 BC), Vol.1, pp.1-24, 査読有り

主要なもの以外を含めた総件数：26 件

[学会発表](計 20 件)

- 矢澤 健、吉村 作治、2019、紀元前 2 千年紀エジプトの葬制の変遷を探る ダハシュール北遺跡第 25 次調査 (2018)、第 26 回西アジア発掘調査報告会
- 矢澤 健、吉村 作治、2018、エジプト・ダハシュール北遺跡の中王国時代における葬制の特質とその背景、日本オリエント学会第 60 回大会

Nozomu Kawai, 2018, Some Remarks on the lion goddess at Northwest Saqqara, Golden van Sakkara

矢澤 健、吉村 作治、2018、紀元前2千年紀エジプトの葬制の変遷を探る ダハシュール北遺跡第24次調査(2017)、第25回西アジア発掘調査報告会

馬場 悠男、坂上 和弘、矢澤 健、近藤 二郎、吉村 作治、2017、エジプト中王国時代ダハシュール北遺跡出土人骨の形態および古病理(予報) 第71回日本人類学会大会

矢澤 健、吉村 作治、2017、ダハシュール北遺跡の第13王朝、日本オリエント学会第59回大会

Ken Yazawa, 2017, The late Middle Kingdom shaft tombs in Dahshur North, Second Intermediate Period Assemblages: The Building Blocks of Local Relative Sequences of Material Culture, International Round Table Vienna, June 21st / 23rd, 2017

Nozomu Kawai, 2017, An early Eighteenth Dynasty multiple burial at Northwest Saqqara, Second Intermediate Period Assemblages: The Building Blocks of Local Relative Sequences of Material Culture, International Round Table Vienna, June 21st / 23rd, 2017

Nozomu Kawai, 2017, The Statues of Lioness Goddess at the Rock-Cut Chambers at Northwest Saqqara and Their Funerary Cult in the Middle Kingdom Egypt, Women's Religious and Economic Roles in Antiquity

Nozomu Kawai, 2017, The Lioness goddess statues from the rock-cut chambers at Northwest Saqqara, Sekhmet Omnipresent

河合 望・高橋 寿光、吉村 作治、2017、古代エジプト聖なる丘の発掘調査 エジプト、アブ・シール南丘陵遺跡第25次調査(2016年)、第24回西アジア発掘調査報告会

河合 望、柏木 裕之、高橋 寿光、2016、エジプト、アブ・シール南丘陵遺跡出土、イシスネフェルトの石棺の保存修復と研究、日本オリエント学会第58回大会

日高 遥香、中井 泉、吉村 作治(他5名、8番目)、2016、非破壊オンサイト分析による古代エジプト銅赤ガラスの製法および変遷の解明、日本文化財学会第33回大会

矢澤 健、吉村 作治、2016、紀元前2千年紀エジプトの葬制の変遷を探る: ダハシュール北遺跡第23次調査(2015)、第23回西アジア発掘調査報告会

河合 望、吉村 作治、2016、古代エジプトの聖なる丘の発掘調査 エジプト、アブ・シール南丘陵遺跡第24次調査(2015年)、第23回西アジア発掘調査報告会

吉村 作治、矢澤 健、2015、エジプト・ダハシュール北遺跡第22次調査報告、日本オリエント学会第57回大会

内沼 美弥、阿部 善也、中井 泉、河合 望、吉村 作治、2015、エジプト、アブ・シール南丘陵遺跡出土のローマ・ビザンツガラスの化学組成分析による分類および起源推定、日本文化財科学会第32回大会

Ken Yazawa, 2015, The late Middle Kingdom shaft tombs in Dahshur North, Abusir and Saqqara in the Year 2015

河合 望、吉村 作治、2015、古代エジプトの聖なる丘の発掘調査 エジプト、アブ・シール南丘陵遺跡第23次調査(2014年)、第22回西アジア発掘調査報告会

矢澤 健、吉村 作治、2014、エジプト・ダハシュール北遺跡のシャフト墓の形状と分布について 中王国時代の墓地形成過程解明に向けた試論、日本オリエント学会第56回大会

主要なもの以外を含めた総件数：32件

〔図書〕(計 0件)

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：中川 武

ローマ字氏名：(NAKAGAWA, takeshi)

所属研究機関名：早稲田大学

部局名：理工学術院

職名：名誉教授

研究者番号(8桁)：30063770

研究分担者氏名：近藤 二郎

ローマ字氏名：(KONDO, jiro)

所属研究機関名：早稲田大学

部局名：文学学術院

職名：教授

研究者番号(8桁)：70186849

研究分担者氏名：馬場 悠男
ローマ字氏名：(BABA, hisao)
所属研究機関名：独立行政法人国立科学博物館
部局名：その他部局等
職名：名誉研究院
研究者番号(8桁)：90049221

研究分担者氏名：中井 泉
ローマ字氏名：(NAKAI, izumi)
所属研究機関名：東京理科大学
部局名：理学部第一部応用化学科
職名：教授
研究者番号(8桁)：90155648

(2)研究協力者

研究協力者氏名：柏木 裕之
ローマ字氏名：(KASHIWAGI, hiroyuki)

研究協力者氏名：河合 望
ローマ字氏名：(KAWAI, nozomu)

研究協力者氏名：馬場 匡浩
ローマ字氏名：(BABA, masahiro)

研究協力者氏名：高橋 寿光
ローマ字氏名：(TAKAHASHI, kazumitsu)

研究協力者氏名：矢澤 健
ローマ字氏名：(YAZAWA, ken)

研究協力者氏名：坂上 和弘
ローマ字氏名：(SAKAUE, kazuhiko)

研究協力者氏名：阿部 善也
ローマ字氏名：(ABE, yoshinari)

研究協力者氏名：西本 真一
ローマ字氏名：(NISHIMOTO, shinichi)

研究協力者氏名：平田 和明
ローマ字氏名：(HIRATA, kazuaki)

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。